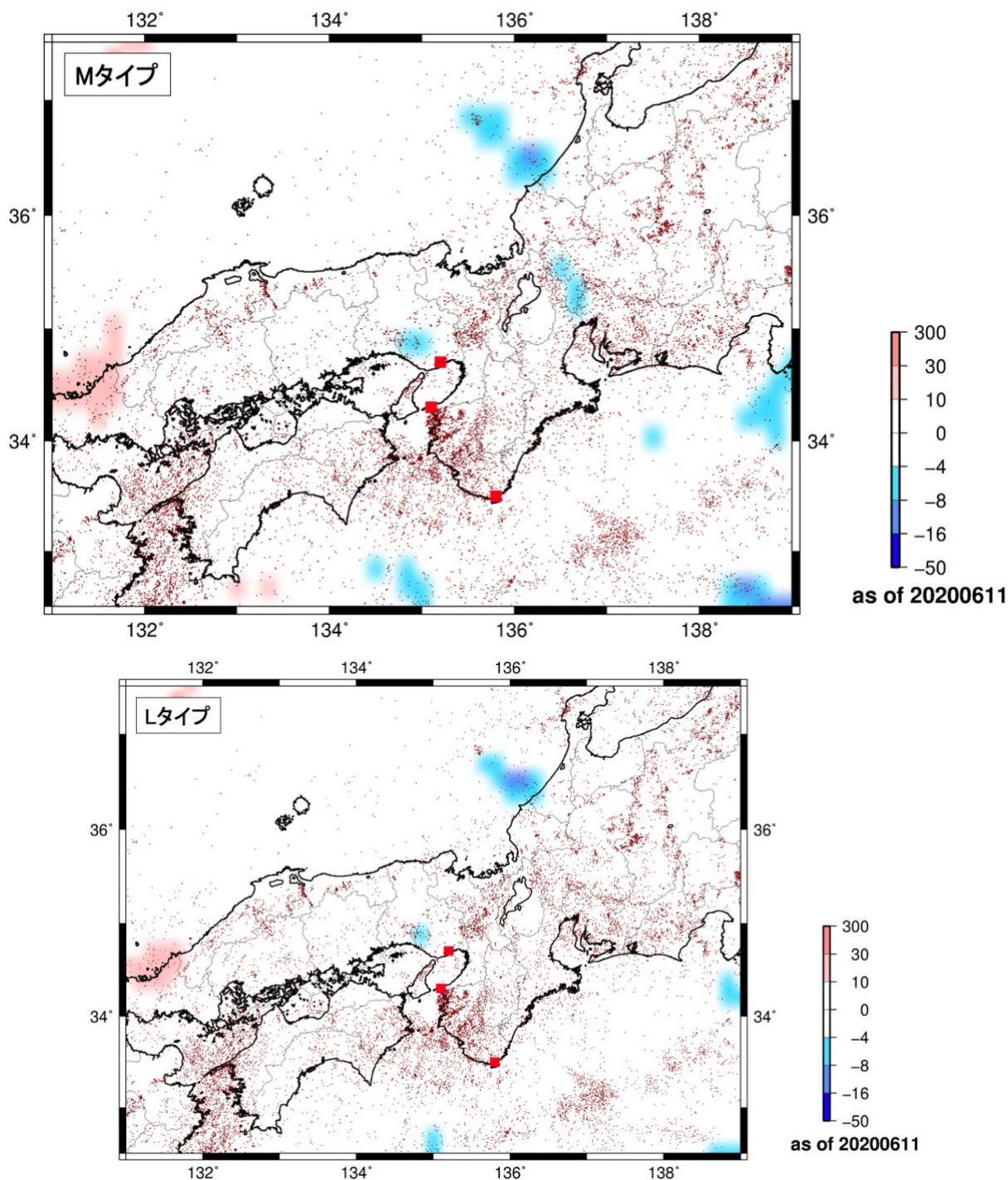


中部・近畿・中国・四国地方の地下天気図®

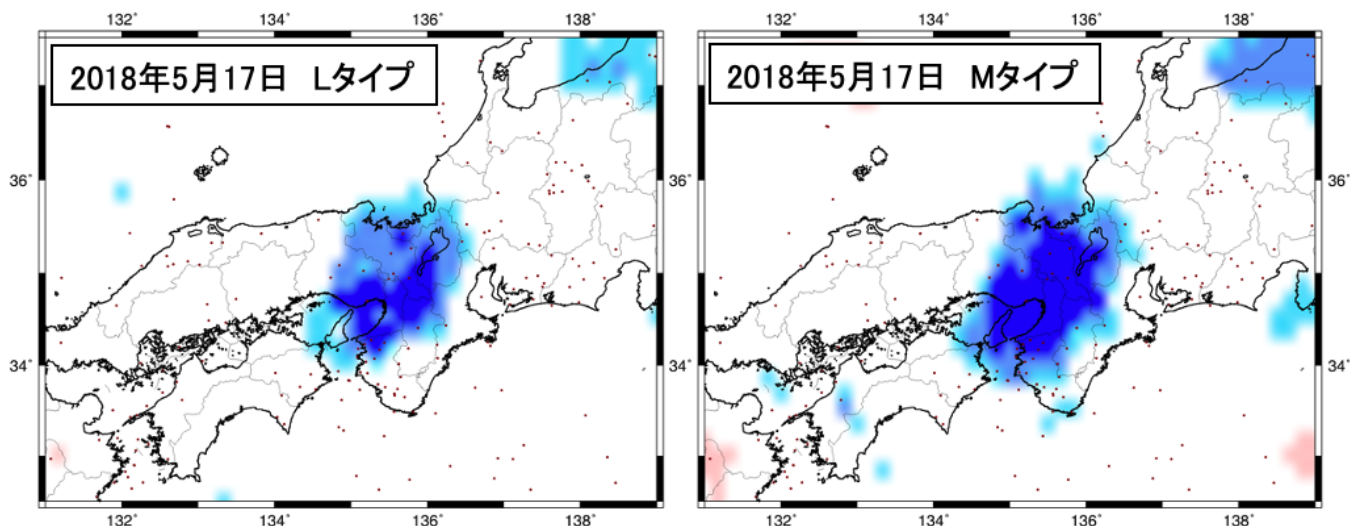
5月11日のニュースレターに引き続き、中部地方から中国・四国地方にかけての地下天気図解析結果です。今週号では、これまで報告して参りました M タイプの地下天気図での近畿地方中部から紀伊半島にかけての地震活動静穏化異常がほぼ消失している事がわかりました。次にお示しする図は6月11日時点の M タイプ地下天気図です。参考までに同じ日の L タイプ地下天気図をその下のお示しします。





上記の2つの地下天気図を比べると、ほとんど同じ様相となっている事がわかります。実は地下天気図解析で、より精度が高いと考えられるのが、LタイプでもMタイプでも(計算のアルゴリズムが違うにも関わらず)ほぼ同じようなパターンを示した時なのです。

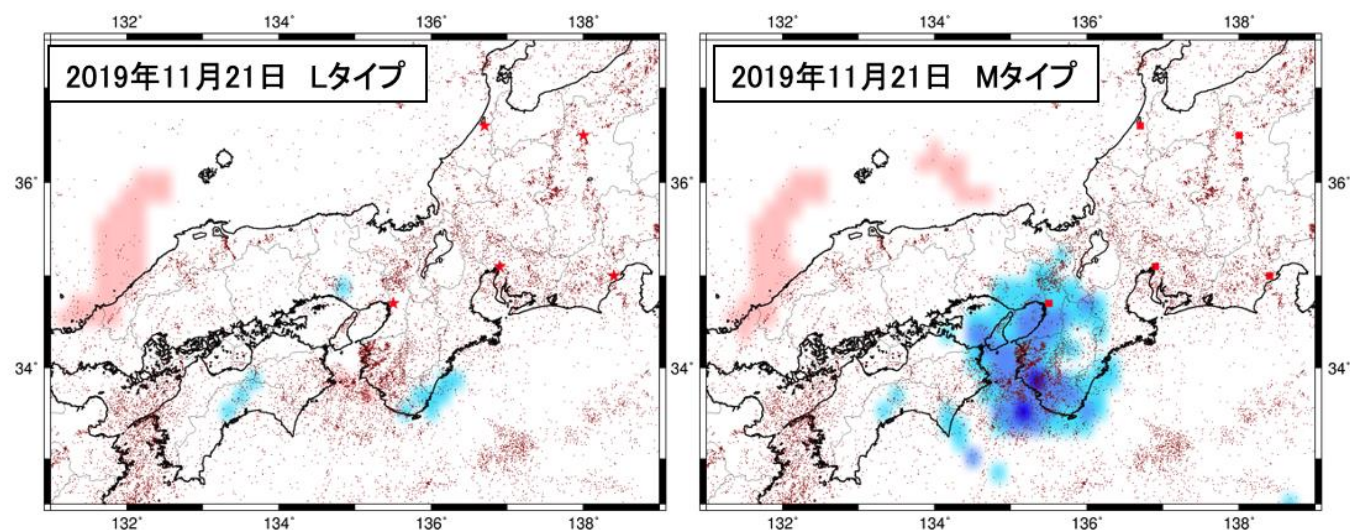
次の図は2018年6月に発生した大阪北部地震(2018年6月18日、M=6.1)発生1ヶ月前のLタイプとMタイプの地下天気図です。どちらのタイプの地下天気図でもほぼ同じ場所に青い静穏化の異常が広がっている事がわかります。



それに対し、2020年の異常は、Lタイプではあまり顕著な静穏化の異常とはならず、Mタイプのみに顕著な異常だったのです。

比較のために次にお示しするのが、今回の異常が最大であった昨年11月21日時点のLタイプとMタイプ地下天気図です。明らかに大阪北部地震前とは状況が異なっている事がわかりになるかと思います。

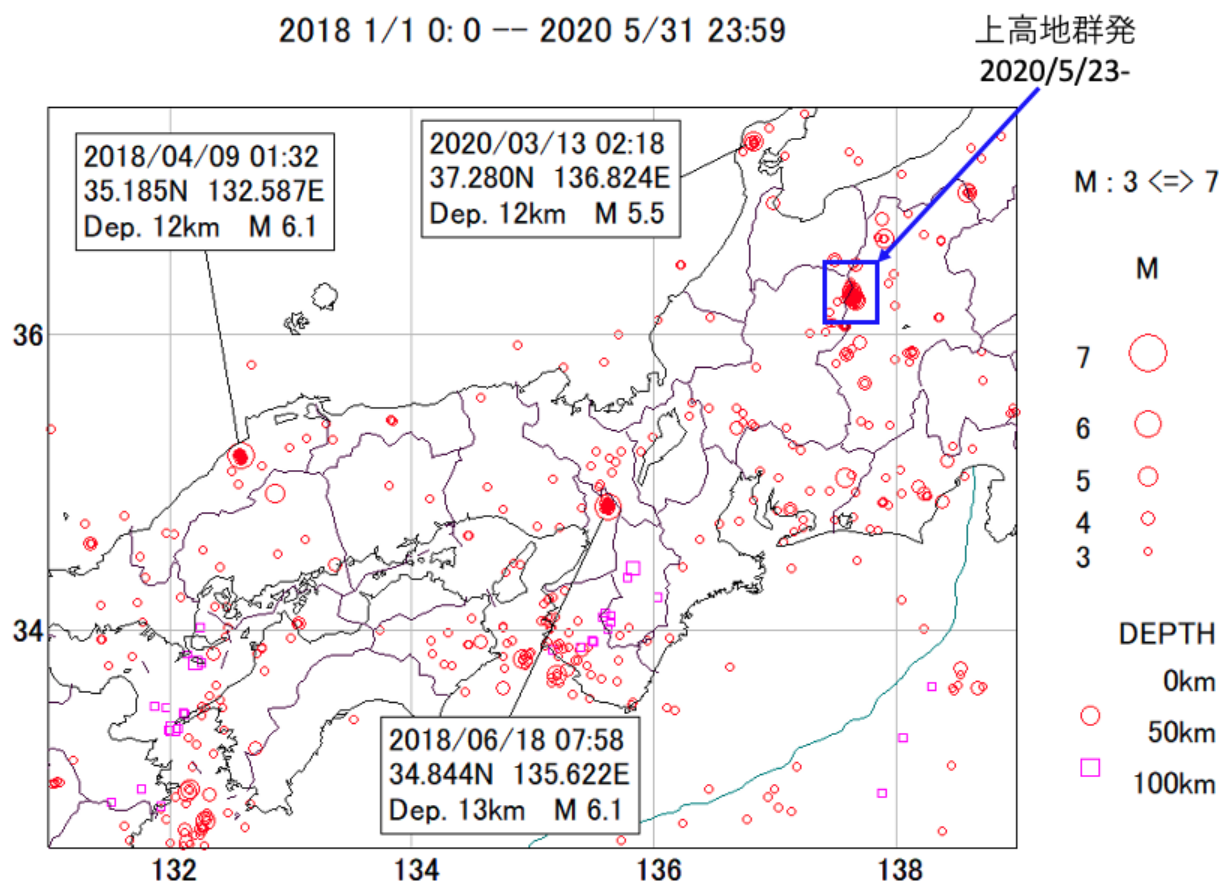
現時点の解釈として、紀伊半島を中心とした関西地方は、大地震発生の準備が整っていると判断できますが、その確度は2018年の時ほどは高くないと考えています。





中部・近畿・中国・四国地方の地震活動の状況

次にお示しする図は、2018年以降のマグニチュード3以上の地震をすべて図示したものです。この期間には2つのマグニチュード6以上の地震が発生しました。



次にこの領域で発生した地震の数を積算したグラフをお示しします。積算図なので、常に右上がりの図となります(新型コロナウイルスの感染者総数の積算グラフと同じ図です)。

この図は、地震学で昔からよく使われていた図で、グラフが急に上昇すれば(右上がりが大きくなれば)、地震発生数が急増した事を意味します。逆にグラフの傾きが小さくなった場合には静穏化が発生したという事になります。

やはり2回のマグニチュード6クラスの地震によって、地震発生数が増加した事がわかります(グラフが階段状になっている)。また2019年中頃より、それまでの平均的な地震発生数(青の点線)より、実際の地震発生数が少なくなっている事がわかります。しかしこのグラフでは静穏化が図の中のどの領域で発生しているのかはわかりません。それに対し地下天気図解析ではどこが静穏化しているのかが、視覚的に容易に判断できる訳です。

このグラフから、5月末から始まった上高地周辺での群発地震活動がいかに激しい地震活動であるかを知る事ができます。

現在のこの地域は大阪北部地震以降、やはり不安定な状況であると言わざるを得ない状況です。

